



一皮膚科医のターニングポイント

松倉 節子
丸子中央病院皮膚科部長

2022年の春、横浜市内の500床の病院の皮膚科部長を辞し、長野県上田市内の200床ほどの総合病院に一人部長として就職した。現在勤務するのは、新幹線の上田駅から車で20分ほどの丸子地域(旧丸子町)という約2万人の人口を抱える地方の街中の病院である。地域に皮膚科専門の常勤医がいないため、住民から長らく皮膚科開設の要望があり、私が赴任したことで病院内に皮膚科が新設された。

私自身は生まれたときから東京の郊外、大学からは横浜に住み、家族の留学も含め3年の海外生活をしたが、地方に住むのは初めてである。当初は「ずいぶん無謀な決断をしてしまったかな」と思ったが、周りのスタッフや地域の方々に支えられながら、皮膚科専門医として奮闘する毎日である。

自分が皮膚科を選択した動機は何だっただろうと振り返ると「みて触って得られる所見が診断に直結し、治療の結果が医師にも患者にもこれだけ明確にわかる科はない」こと、「診断から治療までを自分でまっとうできることが多い」ことなどが決め手だったように思う。経験すればするほど面白みが増すのが皮膚科であるといまだに感じることも多く、それは横浜にいたときも現在の勤務地でも大きな変わりはない。むしろ土地が変わったことで、これまで目にすることのなかった自然に近い場所ならではの皮膚疾患にも多く遭遇する。また、横浜の大学を卒業し母校の大学病院や関連病院を中心に勤務してきた私にとって、多くの皮膚科医を有する大都市部の診

療体制と比べると、地方にここまで皮膚科専門医が少ないということは驚きであった。耳鼻咽喉科や皮膚科などマイナー科の専門医が、とにかく少ないのである。

横浜での二十数年間の医師としての日々は先輩にも後輩にも恵まれ、多くのことを学んだ。母校の当時のメインテーマであったアトピー性皮膚炎や食物アレルギー、重症薬疹などを学び、その後は自己免疫性水疱症、そして接触皮膚炎にも関わることになった。これらの疾患を診療し研究する中で、自分にとってラッキーであったことは、学内外を問わず尊敬する多くの先輩に出会えたこと、そして生物学的製剤の登場前後の劇的な違いを目の当たりにしたことだろうか。これら新しい薬剤の登場で患者さんの状況が劇的に変化したことは、以前の治療困難な時代を経験したからこそその感動であるともいえる。恵まれた環境の中、「皮膚科は楽しい」という一心で最初の20年を駆け抜けた気がする。

都会で働きながら子育てを終えた後、場所を変えて、これまでの自分の経験を生かすことができないかと考え、皮膚科医の不足する地域で働くことを選択した。祖父母の代から都会育ちの私としては、周囲もびっくりの選択ではあったが、面白いターニングポイントになったと思っている。